

『千載佳句』の研究

劉 瑩

本論文は、『千載佳句』に関する研究である。『千載佳句』の本文の価値を論じる第一編と、『千載佳句』の後世への影響に論及する第二編とからなり、五章に分けて、『千載佳句』所収佳句の本文の実態や、佳句に見られる漢詩文表現が日本漢詩や和文学の分野で受容されるありかたなどを論じた。

第一編 『千載佳句』の本文価値の研究

第一編に収めた三章では、中国に現存する唐詩集の諸刊本や日本・韓国に残存する唐詩集の旧鈔本、そして同じ佳句選として平安時代の古写本が多く残っている『和漢朗詠集』を利用し、『千載佳句』所収佳句の本文の価値について論じる。

第一章 『千載佳句』と『和漢朗詠集』との重複佳句について

——白居易の詩を中心に——

平安時代の佳句選の先駆的存在として、『千載佳句』が部目の分類から漢詩句の選取に至るまで『和漢朗詠集』に多大な影響を与えたことは周知の事柄である。そればかりでなく、『和漢朗詠集』の平安時代の古写本に見られる異文についても、『和漢朗詠集』が独自に改変したという見解のほか、『千載佳句』において生じた異文をそのまま受け継いでいるとの見方もある。しかし、これらの異文が唐詩の旧鈔本の本文と一致する場合、或いは旧鈔本には残っていないが『千載佳句』の本文と一致する場合は、その異文こそが唐代の本来の本文であったという可能性も考えられる。

本章では、『千載佳句』と『和漢朗詠集』に重複する白居易の詩を取り上げて、現存する『白氏文集』旧鈔本に残っていない詩句でも、詩句の内容・解釈や韻律の規則などに基づき、両佳句選の本文こそが白詩の原文である可能性が高いことを明らかにする。また、旧鈔本に見える詩句でも、その本文の解釈や語句の用法に基づく考察が必要であることを論じる。

異体字などによる異同を除き、『千載佳句』と『和漢朗詠集』に重複する白詩佳句と『白氏文集』諸刊本との間に明らかに異同が見られる用例は十八例ある。そのうち、旧鈔本にもとの詩篇が残らないものは六例である。これらは『和漢朗詠集』平安古写本における本文改変に関する先行研究でもしばしば取り上げられてきた。この六例を一例ずつ再検討し、その中には、『白氏文集』の旧鈔本を参照することはできないものの、両佳句選の本文こそが唐代の白詩の原文に近いと判断されるものがあることを明らかにした。

一方で、この六例を除く十二例は旧鈔本に確認できる。旧鈔本にも見られる本文である場合、一般的には、それが白詩の原文だと考えられている。しかし、平安時代の『和漢朗詠集』の流行ぶりを考慮に入れれば、逆に『白氏文集』の旧鈔本の本文が『和漢朗詠集』から影響を受けた可能性も考えられる。現在残っている旧鈔本には、『千載佳句』及び『和漢朗詠集』より時代が下るものがあり、また、旧鈔本相互の間にも異同が見られる例も存在する。旧鈔本と一致するからといって、そのままそれを白詩の原文と断定することは難しい。本章では、旧鈔本と『千載佳句』『和漢朗詠集』とが異なる本文をもつ用例と同じ本文をもつ用例とをそれぞれ取り上げて具体的に検討したうえで、両佳句選の本文が唐代の白詩の原文に近いことを証明し、旧鈔本に見られる詩句でも、その本文の解釈や語句の用法に基づく考察が必要であることを論じた。

第二章 『千載佳句』における漢詩佳句の本文について

——『和漢朗詠集』やほかの旧鈔本資料との比較——

第一章では、白居易の詩を中心に、主に『千載佳句』と『和漢朗詠集』とで本文が一致する例を調査し、重複佳句の本文が唐代の原文を反映していることを証明した。しかし、両佳句選に重出する唐人佳句の中には、本文が異なるものも存在する。しかも、『和漢朗詠集』のみならず、『千載佳句』の本文が、日本に残るほかの唐詩の旧鈔本資料と異なる例もある。

本章では、中国に現存する唐詩刊本の本文を参照しつつ、『千載佳句』と『和漢朗詠集』やほかの旧鈔本資料との間における本文異同の実態や、その異同が生まれた理由について考察し、平安時代における中国漢詩文の流布状況を考察した。

その結果、『千載佳句』と『和漢朗詠集』とで本文が異なっている理由として、従来から指摘されている朗詠の影響などによる本文改変のほか、両佳句選が依拠した唐鈔本の本文がもともと異なっていた可能性もあることが明らかになった。平安時代に流布していた唐詩の旧鈔本は、必ずしもすべてが一致するものではない。『千載佳句』と『和漢朗詠集』との間に本文異同が生じたこと、『和漢朗詠集』平安古写本の二系統の間に本文の揺れが生じたこと、さらに『千載佳句』とほかの旧鈔本資料との間に異なる本文が生じたこと、それらの現象の背景に、中国から日本に伝来した異なる系統の唐鈔本及び北宋刊本の本文の影響が考えられる。

また、平安時代におけるこのような複雑な唐詩集の流布状況は、次章で述べる『千載佳句』の異本の存在にも関連する。

第三章 『千載佳句』における本文異同について

——異本の存在——

本章では、『千載佳句』諸本における本文異同、とりわけ従来あまり注目されていなかった

た「～ィ」とある校合注記が示す本文と本行本文との異同に焦点をあて、その実態及び異同が生じた理由を検討する。

佳句の本文異同の実態を探るに先立って、まず、『千載佳句』の諸本について論じた。奥書などの内容によって、現存する『千載佳句』の五つの写本はすべて後二条院宸翰本系統に属すること、及びそれとは異なる異本も存していたことが判明する。この異本は現在散佚して世に伝わらないが、歴博本の本行本文の行間に記されている「～ィ」の校合注記からその本文の一斑が窺える。また、現存する資料の限りではその異本の素姓を特定することは難しいが、奥書などによると、正安二年に後二条院宸翰本と比較した藤原春範本である可能性が指摘できる。

次に、本文異同が生じた要因の一つとして、字形の類似や佳句が訓読される際の字音・和訓の影響で生じた過誤という場合を確認した。注意されるのは、歴博本と異本における本文異同には、一見字形の類似或いは訓読の際の字音・和訓の影響で生じた誤写のように思われるが、中国側の文献或いは日本、韓国の旧鈔本資料にも同じ異同が確認できる用例もあることである。また、従来日本人による改作と考えられてきた事例の中にも、現存する文献に二種類の本文が存在し、同じ異同が確認できるものがある。さらに、現存する文献の限りでは二種類の本文が見られずとも、かつて存在した可能性を指摘できる例もある。そのような用例を具体的に取り上げて、歴博本と異本との間における本文異同は、もとの漢詩に二種類の本文が存在し、各々が日本に伝来していたことにより生じたものがある可能性を述べた。

最後に、『千載佳句』におけるこのような本文異同が生じた背景を考えた。詩文に関する本格的な校訂作業が行われるのは鎌倉時代に入ってからのことと思われるが、それより前、平安時代後期から既にその発端が現れていた。その校訂作業の結果は、夙に『江談抄』や『和漢朗詠集』の平安古写本のような文献に、異文という形で反映されていた。『千載佳句』の歴博本と異本との間に見られる本文異同もまた、このような時代背景において当時の知識人が行っていた本文校訂作業の反映と考えられる。

本章の考察によって、歴博本と異本との間における本文異同は、字形の類似或いは字音・和訓の影響で生じた単純な誤写もあるものの、従来日本人の改作或いは他の文献からの撰取と思われていたものの中には、実際には、もとの漢詩に二種類の本文が存在し、日本に伝来していたことにより生じたものがある可能性を提示することができた。歴博本と異本との間におけるこのような本文異同はいわば時代の産物であり、平安時代後期・鎌倉時代に存在していた唐詩集の本文の複雑な状況を反映していることが窺える。さらに、このような本文異同の実態から、当時の知識人が披見した唐詩集の本文を本朝の佳句選に忠実に反映しようとした姿勢が垣間見られ、中国漢詩の受容のありかたの一端が窺い知られる。異本の本文は校合注記の形でしか残されていないため、ほとんど重視されてこなかったが、その一部が中国側の資料、さらに旧鈔本にも現存しない本文を留めている点では、域外漢籍資料としての価値も認められる。

第二編 『千載佳句』の後世への影響

第二編に収めた二章では、『千載佳句』所収佳句に見られる漢詩文表現に注目し、それが日本漢詩或いは和文学の世界でどのように展開したかを確認し、『千載佳句』の後世への影響の一端を探る。

第四章 詩語「青嵐」の語意変遷について

——詩語「^{セイラン}青嵐」から季語「^{アオアラン}青嵐」へ——

本章では、『千載佳句』に収録される「好看落月斜銜処 一片青嵐映半環」(天象部・月 257・白居易)という佳句に見られる「青嵐」という語を取り上げて、日中両国における「青嵐」の語意の変遷を検討した上で、詩語「^{セイラン}青嵐」から季語「^{アオアラン}青嵐」が定着した過程及びその理由を検討した。

中国の漢詩文に詠まれる「青嵐」は広く嵐気の意味と捉えられ、竹と緊密に関わり、唐代までは主に竹林にかかる霧・靄の意味で用いられていた。また、中国の漢詩文では、「青嵐」は月とともに詠まれる傾向が窺える。このような傾向は日本漢詩にも受容されていることが確認できる。ところが、日本漢詩に詠まれた「青嵐」の用例の中には、本来の中国の漢詩における「青嵐」と同じ意味で用いられているものがある一方、それとは異なり「風」の意として用いられたものもある。

平安時代、「青嵐」という語は漢詩文にしか用いられなかったが、中世から徐々に和文学の世界でも使われるようになる。物語をはじめ、仏教説話集や早歌・連歌など各分野にわたって「青嵐」の語が見られる。それら和文学における「青嵐」の用例を概観し、本来詩語であった「^{セイラン}青嵐」が、『和漢朗詠集』所収の別の詩句を介在として中世歌謡・物語・紀行文学に広がり、さらに連歌そして俳諧に受け継がれ、季語「^{アオアラン}青嵐」として定着した過程を明らかにした。また、この過程において、「青嵐」が持つ霧・靄という詩語としての原意が徐々に消え、風という意味で和語「^{アオアラン}青嵐」に転じたことが分かった。

「青嵐」の語意変遷にせよ、詩語「^{セイラン}青嵐」から季語「^{アオアラン}青嵐」として定着したことにせよ、その背景に和語「あらし」の存在が想定され、同じ漢字に対して和語の概念と漢字の原意との間に相違があったことに淵源が求められると考えられる。霧・靄という意味の「嵐」は日本文学では存在感が希薄であった。和歌などの影響もあって、日本人にとって、「嵐」は「あらし」であり、風の意であるという認識が根強く存在していた。こうした文学環境において、「青嵐」や「煙嵐」「嵐気」といった詩語も、「青いあらし」「煙を含んだあらし」「あらしと山気」というように認識されていたことが推測される。こういった詩語の語意に変容が現れたのは、「嵐」字の原意と和語「あらし」の概念との間に相違が存在していたためと考えられる。

中国の漢詩文に由来する詩語などの詩的表現が本朝漢詩や和歌など日本の文学世界に取

り込まれる際、意識的に或いは不注意によって変容が起こることは、これまでも度重ねて論じられてきた。特に和歌の歌語と漢詩の詩語との関わりについて、先行研究が多く見られる。詩語「青嵐」の語意変遷も、こうした文学史上における和漢文学の交流を背景とする一典型例と考えられよう。

第五章 『枕草子』「風は」段における能因本の本文「花風」という表現について

『枕草子』の本文に漢詩文の影響が多く見られることについては、これまでに少なからぬ考究が重ねられてきた。『白氏文集』のような中国の漢詩集からの直接的引用はもとより、『千載佳句』『和漢朗詠集』のような日本で作られた佳句選に収載される詩句からの間接的引用も数多くある。本章では「風は」段における能因本の本文「花風」を取り上げ、三巻本の本文「雨風」と比較して能因本本文の妥当性や、「花風」という表現の生成経路と漢詩文によって形成された暮春風景の表現類型との関わりを論じた。

『枕草子』「風は」段の本文は、三巻本と能因本とがほぼ同じ分量を持ち、内容も大差がないように思われる。しかし、両系統において項目の有無や本文の異同も存在しており、特に「三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹きたる雨風」という条において、三巻本で「雨風」とある箇所は能因本では「花風」となっていることが注目される。この本文の揺れについて、従来は三巻本の「雨風」という本文を取る傾向があった。

本章では、まず古注釈や先行研究が挙げている「雨風」「花風」の先行する用例について、それぞれの問題点を指摘したうえで、清少納言と交流のあった和泉式部の歌や『うつほ物語』『源氏物語』に、「三月ばかりの夕暮れに、ゆるく吹きたる花風」と類似する表現が確認できることを述べた。

次に、「三月ばかりの夕暮れに、ゆるく吹きたる花風」は、和歌の世界ではまだ一般的に賞美する対象となっていなかったが、和泉式部の歌や『うつほ物語』『源氏物語』などでは、夕暮れの風によって花の散りまがう情景が暮春の典型的な風景として描かれ、特に花宴など貴族の春の宴会における一種の類型的表現となっていることを指摘した。能因本が描く「三月ばかりの夕暮れにゆるく吹きたる花風」という風景は、そういった時代的好尚の影響のもとで、清少納言たち平安女流作家に共有されたものであると考えられる。さらに、上述した類型表現で用いられる「暮春の夕暮れ・ゆるく吹く・花誘う風・雪のごとく降れる・鶯・三月晦日」といった素材や表現は、いずれも漢詩文に出自を持つことを指摘した。そして、そのような表現は『白氏文集』などの漢詩集に由来し、『千載佳句』『和漢朗詠集』のような佳句選において一つの類型としてまとめられ、『枕草子』をはじめとする和文学の世界へ受容されるようになったと考えられることを述べた。